



金さんの容疑事件に関連し、寄稿先の左派系情報紙編集部を家宅搜索する警察官ら＝今年8月23日、大阪市内で（人民新聞社提供）

逮捕状 令状請

「捜査の追認機関」懸念

逮捕後は接見も禁止。「外部の様子も分からず、自分が罪人と思いきまされていった」と話す金蔵万さん＝大阪市内で



免許証

期待を抱いた。「裁判所は警察や検察とは違う」と思っていたからだ。だが、約五分間の形式的なやりとりの後、拘留と接見禁止があつさり認められた。理由を聞いたことで、「本名を名乗る」とのことだった。

判所を批判してこなかったことも一因だ」

金さんが抱いた「安易な逮捕、搜索」への疑問は当然のことだ。憲法三三条は何人も現行犯以外は裁判官が発し、理由となつてゐる犯罪を明示する令状によらなければ逮捕されないと規定。刑事訴訟法でも、逮捕のほか、搜索や差し押さへなどの令状手続きを定めている。

裁判所による令状請求のチェックは、捜査機関の下率は0・047%にと

が捜査に名を借りて権限を乱用しないよう歯止めをかけるための制度。捜査機関による人権侵害を防止する役割がある。ところが、チェック機能の実態はどうか。最高裁によると、昨年度に警察や検察が逮捕状を裁判所に請求した件数は十一万六千二百十八件。このうち、裁判所が却下したのはわずか五十五件。却下率は0・047%にと

金蔵万さん「素通り」になつてゐる現状について、元大阪高検公安部長の三井環氏は「裁判官のチェックなど、まったく無い。自ら記録を読み、判断する気がない。拘留を決めるときもそうだ。私の現役時代にも、裁判所に却下された経験は一度もなかった」と話す。

「特に（金さんのケースのような）公安事件では、すべて裁判所への令状請求が通ると考えてよい。裁判所は捜査機関に依存し過ぎてゐる。裁判でも、法廷の証言より検事が取った調書を重視するべし。マスコミが裁



令状請求を人権保護の立場で点検する裁判所。しかし、チェック機能を果たしていないという批判は強い（写真は最高裁判所）

た、こうした安易な令状の扱いは裁判所への信頼を揺るがしている。生田弁護士も「令状許可は第三者機関に委ねてはどうかと思う。裁判所は権力の追認機関となりつ